

福島原発事故被災地の 生活・コミュニティ再構築に向けて — 女性農業者の取組から

岩崎 由美子

はじめに—原発事故被災地の現状

東日本大震災による東京電力福島第一原子力発電所事故から11年が経過した。原発避難12市町村では、2020年3月までに帰還困難区域を除く地域の避難指示が解除され、2022年8月には双葉町・大熊町で特定復興再生拠点区域での避難指示が解除されるなど、帰還困難区域の解除政策が本格化している。鉄道・道路などの交通インフラや公共施設の復旧・整備はほぼ完了し、「福島イノベーション・コースト（国際研究産業都市）構想」などの新産業創出をねらった国家プロジェクトも動き始めた。除染とインフラ整備を基軸とした「空間の復興」に基づく帰還政策は着々と進行している。

しかしながら、避難指示区域の居住率を見ると（5頁表）、主に避難指示の解除時期によって復興の進捗状況は12市町村の間でも大きく異なっており、「不均等な復興」が進行している。帰還する住民は高齢者が中心のため、被災地は著しい高齢化に直面している。雇用の場や仕事の確保、ライフラインの整備、子どもたちの教育環境の問題、低線量被曝リスクへの不安等が、若い世代の帰還を阻んでいる。

また、帰還した高齢者たちの多くは健康で、自ら車を運転するなど自立した暮らしを送ることができる人たちであり、ケアを必要とする高齢者は、故郷に帰りたくとも、子や親族の都合に合わせて避難先で生活するしかない。帰還がなかった住民た

ちも、帰還したことをもって被害がすべて解消されたわけではなく、地域での居住者がいまだ少ないことからコミュニティそのものが成り立っておらず、寂しさや孤立感に苦しむ住民も多い。

避難場所を転々としていた発災直後とは異なり、避難先での暮らしは落ち着きを見せてはいるが、ふるさとの生業と生活を奪われた被災者の喪失感は、今なお続いている¹⁾。

他方で、被災後11年という時間の経過の中、被災者が地域内外の人びととネットワークを形成し、「人間の復興」を目指す動きもまた積極的に展開されてきた。中でも目を引くのは、復旧・復興へといち早く立ち上がり、困難を抱える被災者を支援してきた女性たちの自発的な活動である。彼女たちは、震災直後から復興する主体として被災地で日々の暮らしを支え、生業を再建し、人びとのつながりを築いてきた。特に中山間地域である阿武隈地域では、消費者との交流により食の安全を追求しながら地域の生産とコミュニティの復興に取り組む女性農業者の活動が目を引く。

本稿では、放射能汚染によってふるさどが失われた福島から、食と農の力によってそれらを取り戻そうとする阿武隈地域の女性農業者の営みを通して、今後の復興に向けた課題について検討していきたい。

〈表〉避難地域12市町村の居住状況(2021年6月)

| 解除時期 | 区分 | 市町村 | 居住率 |
|-------|------|------------|-------|
| — | — | 広野町 | 90.2% |
| 2014年 | 全域解除 | 田村市(都路地区) | 85.0% |
| 2015年 | 全域解除 | 楢葉町 | 60.7% |
| 2016年 | 一部解除 | 葛尾村 | 32.0% |
| | 全域解除 | 川内村 | 82.1% |
| | 一部解除 | 南相馬市(小高区等) | 57.1% |
| 2017年 | 全域解除 | 川俣町(山木屋地区) | 47.5% |
| | 一部解除 | 浪江町 | 10.2% |
| | 一部解除 | 飯館村 | 29.0% |
| | 一部解除 | 富岡町 | 14.0% |
| 2019年 | 一部解除 | 大熊町 | 3.3% |
| 2020年 | 一部解除 | 双葉町 | — |

出典：福島県「福島県総合計画」(2021)

もらうだけではなく動きだすための支援を— 「かーちゃんの力・プロジェクト」を起点として

福島県東部に広がる阿武隈地域は、浜通りと中通りの間に位置する標高200～700mの丘陵地である。雪は少ないが冬の冷え込みは厳しく、その気象条件が、凍み餅、凍み大根、凍み豆腐など、いわゆる「凍み文化」と呼ばれる独自の食文化を生みだしてきた。こうした自然環境や食文化を活かそうと、2000年代初頭から、農産物加工や直売所、農家レストラン、グリーン・ツーリズム等の地域活性化の取組が盛んに行われていた。

これらの取組の中心的担い手は女性農業者であった。たとえば、「までいな村づくり」で知られる飯館村では、直売所「まごころ」のほか、どぶろく特区による農家レストランや女性農業委員の経営する農家民宿などが地域の交流人口の増加に大きく貢献していたし、葛尾村や浪江町、川内村でも、営利法人や企業組合として法人化を果たした女性起業グループが活躍していた。

しかし原発事故により彼女たちは地域外への避難を余儀なくされ、これまでの経験や生活技術を発揮する場を奪われてしまった。そこで2011年10月、女性農業者と福島大学小規模自治体研究所との協働により「かーちゃんの力・プロジェクト」(以下、「かープロ」)が発足し、地域づくりの蓄積を今後の復興支援に活かそうと活動を開始した²⁾。

活動の立ち上げに当たり、飯館村から福島市内

に避難していた女性農業者のAさんが、知り合いの女性の避難先を訪問して聞き取りをしたところ、「もう、もらうだけの支援ではなくて動きだすための支援がほしい」、「一人じゃどうにもならないけれど、つながれば動きだせる」等の声が上がった。そこで、福島市内の農産加工施設「あぶくま茶屋」を借り上げ、漬け物加工や菓子、健康弁当の製造、伝統食の継承等の事業を開始した。プロジェクトには、福島市や二本松市、三春町の民間借り上げ住宅や応急仮設住宅で避難生活を送っていた女性たち10数名が参加し、行政からの補助金や全国に広がったサポーターからの寄付金等を活用して活動を行ってきた。

「かープロ」の発足時に課題となったのは、消費者に提供する「食の安全」をどう確保するか、という点だった。そこで、チェルノブイリ支援を行ってきたNPOのアドバイスを参考に、食品の原材料や農産加工品はすべて放射性物質測定検査を実施して公開することとした。また、ウクライナの食品基準値を参考にして独自基準(20Bq/kg)を設定し、それをクリアした商品にロゴシールを貼付することを取り決めた。

2012年5月、福島市内で行った「かープロ」のイベントで、子ども連れの母親から「このお店のように、きちんと測定してあるものは安心して子どもに食べさせることができる」と感謝されたとき、Aさんは「震災後、助けてもらってばかりだったけ

ど、こうして人の助けに少しでもなった。やってよかったね」とうれしそうに語った。これまで「支援される側」として受動的な対象とされてきた避難者が、食の安全・安心へのこだわりという信念に基づき力を発揮することで、「支援する側」へと反転した瞬間であった。こうした被災当事者による被災者支援の取組は、被災者と地域社会・他地域とのつながりを豊かに育みながら、地域性と人間性に根差した等身大の復興への歩みを進めてきた。

女性農業者たちによる生活・コミュニティ 再建の模索―「カープロ」後の取組

結成から6年目となる2017年3月、「カープロ」は、あぶくま茶屋を閉鎖して解散した。契機となったのは同月末に行われた避難指示区域指定の解除である。帰還に関する各自の選択を踏まえると、これまでのような一拠点での活動継続は困難になるという判断からであった。

その後のメンバーの状況を見ると、ふるさとに帰還した人、避難先との二地域居住を続ける人、帰還をあきらめ避難先に生活拠点を築いた人とさまざまであるが、営農再開や加工品づくり、集落住民が集うサロンの立ち上げや、ふるさとの食の伝承活動など、「カープロ」での体験を礎とした各自の取組は多様に広がっている。以下では2名の取組を紹介したい。

(1)ふるさとに帰還して加工に取り組むBさん

飯館村のBさん(67)は、避難指示が解除になった2017年4月に飯館村に帰還した。震災前は自分たち夫婦と息子夫婦、孫4人の8人家族だったが、震災後福島市内の公務員住宅に避難し、息子家族とは別に暮らすことになった。かわいがっていた孫と離れるのが寂しくて、しばらくは毎日泣いていたという。

避難先で借りた部屋は2Kと手狭で、子どもや孫がやって来ても寝る場所もなく、息が詰まる生活だった。そこで、避難指示解除を待ってすぐ飯館村に帰還することを決めた。

もともと米・葉たばこ農家であったBさんは、帰還してから畑作業に力を入れた。「買ってきて食べる野菜はおいしくなかった。自分たちが食べる

分くらいは自給しよう」と20aほどの畑でさまざまな野菜をつくり始め、飯館村の道の駅「まてい館」への出荷を始めた。

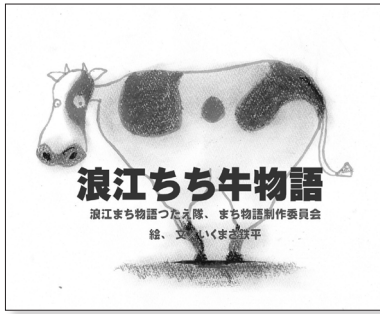
2020年3月には、自宅敷地内に味噌加工場を建設し、2021年には500キロの味噌を製造販売した。加工所建設に踏み切ったのは、自身の病気がきっかけだった。病気になったことで食の大切さを考えるようになり、「体にいいものをつくりたい」という願いとともに、「自分が飯館で生きてきた証しを残したい」と思ったからだという。味噌加工のほか、地域の伝統食である凍み餅製造にも力を入れており、およそ5,000枚を製造販売している。原料となる山野草のごんぼっぱ(オヤマボクチ)は、山で採取することができないために、畑で栽培している。

Bさんはまた、行政区の住民たちが気軽に集える場をつくろうと、「お茶のみ会」というサロンを立ち上げた。月1回、住民が30名ほど集まってともに調理をしながら会食を行う。近隣自治体に避難している人や、復興公営住宅に住んでいる人も車でやってきて参加する。コロナ禍でしばらく休止していたが、凍み餅や味噌じゃがなど懐かしい地域の食をともに楽しむ場ともなっている。

2021年からは、飯館村の小学校で伝統食の調理実習の指導を行っている。村の小学生は、原発事故後に生まれた世代であり、当時村民が直面した現実を知らない子が多い。彼らに原発事故の経験をていねいに伝えていくことも自分の役割であると、Bさんは言う。

(2)ふるさとに通い営農再開に取り組むCさん

浪江町のCさん(70)は、津島地区の出身で震災前は浪江町役場に勤務していた。原発事故により津島地区は帰還困難区域に指定され、今も帰ることができず、酪農家だった夫は廃業せざるを得なかった。そこで、避難先の福島市内に農地と加工所を確保して、じゅうねん(エゴマ)の栽培と加工品づくりを始めた。じゅうねんは、町職員だった90年代に耕作放棄地解消のために振興していた作目である。当時Cさんは住民にじゅうねんの種を提供し、空いている土地に植えてもらう「一人一畝歩(ひとりひとせぶ)運動」に取り組み、「つしま活



浪江まち物語伝え隊の作品の一つ
紙芝居「浪江ちち牛物語」

性化企業組合」(2005)の設立を支援するなど加工所と直売所の経営にかかわってきた。

2016年から、彼女はふるさとの浪江町でもじゅうねんの作付に取り組み始めた。町内の除染済みの農地を借りて試験栽培を行ったところ、放射性物質が検出されなかったことで本格的に栽培を始め、かつての仲間やボランティアの協力も得て経営規模を6haまで拡大させた。避難先の福島市から浪江町までは往復4時間かかるが、「ふるさとを失いたくない」一心で行っているという。

Cさんもまた、地域の伝統食を次世代につなごうと、「浪江町の郷土料理を愛する会」を仲間と立ち上げ、浪江の農家が「こじはん」(おやつ)として食べていた「かぼちゃまんじゅう」などの調理講習を学校で行った。また、「浪江まち物語伝え隊」を結成し、被災地の現実を紙芝居で伝える取組にも参加している。作品の一つである「浪江ちち牛物語」は、原発事故で殺処分される牛を主人公としている。牛の「何でおらたち、殺されなきゃなんねんだ」という言葉をただ伝えたくて、北海道、九州、沖縄までこの紙芝居をもって回ってきたという。

このような活動へと彼女を動かしているのは、「福島のを発信したい」という思いである。まるで原発事故などなかったかのように、原発再稼働や新增設が声高に叫ばれている今、それでも「なかったことにはしたくない」という彼女の声は、性懲りもなく同じ道を突き進もうとする日本社会へのメッセージである。

むすびにかえて—「人間の復興」に向けて

原発事故被災地では、放射能汚染によって、生

を支える基盤である自然環境と地域コミュニティが根こそぎ破壊され、「ふるさとの喪失」がもたらされた。除染とインフラ整備という大規模なハード事業を基軸とする空間の復興は進んでいるが、帰還をあきらめた人びとも数多く、10年以上経過した今でも、避難者にとって復興は実感を持ったものにはなっていない。

本稿で取り上げた女性たちの活動は、ハード事業を中心とした「大文字の復興」とは異なり、厳しい状況の中で分断された人びとを食と農でつなぎ直し、地域でかつて当たり前に営まれてきた暮らしを取り戻そうとする「小文字の復興」の取組であると言えよう。避難者と避難者、避難者と非避難者をつなぎ、被災地の生産者と支援者の消費者をつなぎ、現在世代と将来世代とをつなぐ食と農の力に、女性農業者たちは希望を抱き、被災住民の尊厳を取り戻すためにそれぞれの場で活動を展開している。彼女たちの取組は、人と人とのつながり、人と自然とのつながりの回復が、個々人の生活再建とコミュニティ再生の基礎となることを教えてくれている。

福島の復興はいまだ途上にある。復興を被災者自らの手に取り戻し、個々人の自己決定と他者との協働によるオルタナティブな復興の道筋を描くためにも、一層の実践の積み重ねと研究の深化が求められている。

[注]

- 1) 例えば、双葉地方7町村(浪江町、双葉町、大熊町、富岡町、楢葉町、葛尾村、川内村)の住民を対象としたアンケート調査によれば、現在の暮らしの課題について「強くあてはまる」との回答が最も多かったのは、「地域のつながり、交流が薄くなった」(46.0%)、および「家や庭、田畑が荒れ放題になってしまって、つらい」(43.6%)であった。(「第2回双葉郡住民実態調査報告書」、福島大学うつくしまふくしま未来支援センター、2018)
- 2) 「カープロ」については、塩谷弘康・岩崎由美子『食と農でつなぐ 福島から』(岩波書店、2014)を参照されたい。



いわさきゆみこ：福島大学教授。専門は農村生活論、社会計画論。主著は、『成功する農村女性起業』(共編著、家の光協会、2001)、『食と農でつなぐ 福島から』(共著、岩波書店、2014)、『<食といのち>をひらく女性たち』(共著、農文協、2018)、『小さな自治体の大きな挑戦』(共著、八潮社、2011)など。